

子どもの手を握ってわかること

親が中高生のわが子（特に父と女の子、母と男の子）に愛情表現するのはむずかしいなあと思えます。保育園や小学校低学年のころにはもっともっと自然に愛情表現できたはずですが、そのころに十分子どもたちとの時間をとってやれたかというところかなり疑問です。

若い先生方には常々言っています。勤務としての生徒との関わりも大切だが自分の子どもには今しかできないわが子とのふれ合いを大切にしてほしい。

15年以上前のことですが、へき地の小学校に教頭として勤務していた時のことです。生活科か総合学習の時間だったと思います。学級担任の代理で低学年の児童数名を連れて近くの用水トンネルの探検に行ったことがあります。トンネルは大人が腰をかがめてやっと一人通れるくらいの広さで、かつてこの地区の夏の恒常的な水不足を解消するために先人が手掘りで掘ったかんがい用水のためのトンネルです。長さは40mくらいだったでしょう。

私が先頭の1年生の女の子の手をとり、小さい子順に一列になって手をつながせ、トンネルの中に進みました。初めは歓声をあげていた子たちも行く手の明かりが乏しくなるにつれて緊張と恐怖でだんだん声が小さくなります。私が手をとる1年生の女の子は小さな手でだんだん私の手を強く握りしめてくるのがわかります。私も「大丈夫だよ」と無言で握りかえします。静まり返った行進が続きました。ようやく向こうに出口の明かりが見えてきたころ子どもたちの声もどりました。それと同時に彼女の小さな手の握りもやわらかくなってきました。息のつまるようなトンネルを抜け、外の空気を胸いっぱい吸って彼女の手を解放した時、私の手は彼女の小さな手の汗でびしょりぬれていました。

この時、私の娘も小学校低学年でした。